

「筋肉痛だと思い、湿布を貼ったらかぶれました」。そう言われた患者を診察してみると「帯状疱疹」だったことがあります。体の片方にぴりぴりとした痛みがあり、赤く小さな水ぶくれが帯状にできていました。

帯状疱疹を起こすのは、子どもの頃にかかった水ぼうそうのウイルス。脳や脊髄の神経の根元に潜んでいて、免疫力が低下すると神経を伝わって皮膚に達し、痛みと赤みを伴った水ぶくれができます。だから、水ぼうそうにかかった人は誰でも、帯状疱疹になる可能性があります。帯状疱疹自体は他の人に移りませ

## 皮膚の病気あれこれ

岩崎泰政

7

### 帯状疱疹



イラスト・霜野美香

## 抗ウイルス薬早く服用

ん。再発の場合は、免疫力が極端に落ちている可能性があります。がんがないかなどを調べるために、内臓の検査を勧めています。

水ぶくれができて最初、痛みがひどい場合や、数個の赤みだけでほとんど水ぶくれができない場合もあります。経験豊かな皮膚科医の診断が欠かせません。帯状疱疹が顔にできると、目の角結膜炎や聴力の低下、めまいが起ることがあります。眼科や耳鼻科での診療が必要となります。

少しでも早く抗ウイルス薬を飲み始めることが治療の基本です。ウイルスの増殖と、症状の進行を抑えます。腎臓が弱い人は、量を少なくする必要があります。しかし最近、腎機能が悪くても減量が不要で、十分な効果が期待できる薬も開発されました。痛みが強いときは、痛み止めも飲みます。徐々に軽くなりますが、神経痛として何カ月も残ることがあります。

実は、80歳までに3人に1人は帯状疱疹を経験します。最近では、体の弱ったお年寄りが重い帯状疱疹になるのを防ぐために、ワクチンが使用できるようになりました。

んが、乳幼児に水ぼうそうとして移す恐れがありますが、元気な小学生でもかかることがあります。普通は加齢や疲労、ストレスなど、一生に一度しか発症しませ

(岩崎皮ふ科・形成外科院長 川福山市)